

30. 高気圧酸素療法の現況と将来

— 集計調査による解析

武谷 敬之* 北條 泰**

日本高気圧環境研究会が発足して以来12年が経過したが、最近の日本の高気圧治療は曲角にきている様に思われる。

先頃の第6回国際高気圧環境医学会議に於ても、各国とも事情は少しく異なるがやはり我国同様、転換期をむかえている様に感ぜられた。

ちなみに、最近6年間のIndex Medicusを分析してみると、1970年には206編の報告があったのに対し、5年後の1975年には101編と半減している。

この間、我国に於ては20編から3編に激減しており、論文の数からみると高圧酸素療法ブームは去ろうとしているように思える。

又、Index Medicusの最近6年間の論文総数は869編で、言語別にみると、英語が448編と過半数を占め、次いでロシア語、フランス語、ドイツ語、イタリア語と続き日本語の論文は6番目であった。

名古屋大学高気圧治療部が本年行なったアンケート調査では、実際に稼動しているchamberは北海道から沖縄まで全土にまたがり、各地域に5~10台の装置がある。しかしアンケート回収率65%で、無回答の施設の大半は小規模病院及び開業医でありその装置は死蔵されていると想像される。

又、回答を得た施設の内容をみると、総治療件数53115件で内、79%が第二種装置で行なわれており、救急的適応(本学会安全基準に基づく)に対して使用された件数は年間2000件以内

であり4%以内で、他の大部分は非救急的適応に対して使用されている現状である。

更に、本年5月末に開かれたアメリカのUnder Sea Medical Societyの委員会のレポートによると、適応疾患が、厳しく限定されており、カテゴリIからIVまでの中、IIIとIVに対しては、第3者の支払側から費用が支払われないとされており、本学会の定める適応疾患の中にも、救急的適応の心筋梗塞、重症低酸素脳障害が、カテゴリIIIであり、本邦においては名大をはじめ良い成績の報告がある突発性難聴については全くふれられていない。

非救急的適応群では、慢性末梢循環障害はカテゴリIIIであり、皮膚移植を除いた他の全てについては言及されていないありさまである。

勿論カテゴリIIIが全く適応でないと云うわけではなく基礎的、実験的、臨床的なデータが充分ではないとされているわけだが、日本よりはるかに高い治療費をとっているアメリカでは厳しい姿勢を示す必要があるであろう。

我国に於いても適応疾患を洗い直す必要があるのではなかろうか。

高圧酸素治療の発展、普及を阻んでいる因子として、専門家、技術者等、人の不足や、保険点数(特に非救急的適応疾患に於て)の低さ等が挙げられるが、保険点数の改善が望まれる時、適応疾患に対する安易な態度は避けなければならない。

本道に於いても、200海里問題が水産界に深刻な影響をもたらし、養殖漁業への模索が続けられている。この必要性から職業潜水士は500名を越え、なお、年々その数を増して来ている。

* 国立札幌病院麻酔科

** 美唄労災病院高圧医療部

今後、潜水医学は増々その重要性を増していく事であろう。

各施設の全国的交流をより頻回に行ない、デ

ーターの集積を全国的に施行整理し、適応疾患を拡げていくとともに、国際的視野のもとに、お互いの発展を期したいものである。